
ミニ物語～ヒトリ～

凧夜 流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミニ物語〜ヒトリ〜

【Nコード】

N9066J

【作者名】

風夜 流歌

【あらすじ】

一人、ヒトリ、独り・・・。

『ヒトリ』を題材にした短編集です。

赤い世界

誰もいない。

この町に、この国に、この世界に、誰もいない。

いるのは、自分だけ、この世界に、自分だけ…。

何で誰もいないのか、それは覚えていないけど、ひどく恐ろしい事だったと思う。

誰もいない。

違う、ちゃんとそこにいる。

いっぱい、ソレはそこにいる。

けどソレらは僕の足下に横たわって、動かない。

真っ赤に染まって、動かない。

僕の手も赤に染まっている。

服も、靴も、肌も、全部真っ赤に染まっている。

何で僕だけ動いているのかわからない。

ただ僕は、独りで壊れたように笑っていたんだ。

赤い世界で、泣きながら、笑っていたんだ。

赤い世界（後書き）

なんかぶっ壊れてる・・僕・・・。

青い空（前書き）

※死にネタ注意

青い空

誰も知らない秘密の居場所。

誰にも見つからない秘密基地。

そこから見える空はいつも青くて静かだった。

僕はそこが大好きで、いつもいつもそこに通っていた。

良いことがあったときも、イヤなことがあったときも・・・。

この場所で、青い空を見ていると、不思議と嬉しくなったから。

広くて真っ青な空を見ていると、気持ちがラクになれた気がしたから。

この場所に住むのが僕の唯一の夢だった。

誰にも邪魔されず、空を見るのが夢だった。

でも、ついこの間、その夢が叶ったんだ。

僕は、やっとラクになれる。

いつの間にか空から延びてきていた縄に自分の首をかけたんだ・・・。

誰も知らない秘密の居場所。

誰にも見つからない秘密基地。

今は僕も真っ青になってあの青い空を見つめ続けている。

青い空（後書き）

あゝあ。死にネタにする気はなかったのに・ω・、

赤い湖

僕は、アクマの子供。

この世に生まれてきちゃいけなかった、独りぼっちの子アクマ。

僕が生まれてすぐに、産んでくれたお母さんが亡くなった。

数日後に、お父さんも亡くなった。

おばあちゃんもおじいちゃんも、僕と関わった親戚達はみんなすぐに死んでった。

僕に触れた奴はみんな死んだ。

僕と話した奴はみんな死んだ。

僕とすれ違った奴はみんな死んだ。

死んだ原因はみんな不明のままだった

ある日僕は思ったんだ。

僕はきつとアクマの子供。

僕は、僕のせいで人が死ぬたびにナミダを流す。

アクマは赤いナミダを流と聞いた。

だから、僕は赤いナミダを流すんだ。

ポタリ、ポタリと留めなく、赤いナミダを流すんだ。

僕はアクマの子供。

この世に生まれてきちゃいけなかった、独りぼっちの小アクマ・・・。

赤い湖の真ん中で、僕はまた泣いている。

赤い湖（後書き）

この作品だけじゃなく他の作品のほとんどが意味わからないと思いますが、このヒトリの話は人によって受けとり方が違うと思います。2つ3つあると思いますがどれも結構面白いww

黄色い花（前書き）

結末は人によって違う。

黄色い花

僕は、野原に一つだけある小さな蕾。

君と同じようにひとりで風に吹かれている頼りない蕾。

僕とキミは違うね。

君はある日静かに僕にそう言ったんだ。

僕は首を傾げるように揺れた。

だって、キミはこれから花を咲かせるんだ、僕には明るい未来なんか見えやしないんだよ。

君は悲しげにそう言ったね。

それは違うよ。

僕は必死に訴えた。

僕は君がうらやましい。話せるし、歩けるし、感情も出せる。

僕は君が本当にうらやましく思うよ。

僕は話せない。

でも必死に訴えた。

聞こえない、はずなのに、君は笑ってくれたね。嬉しそうに、ありがとう、って言ってくれたね。

僕はそれだけで嬉しかった。

季節は春、野原に一輪の花が咲いていた、黄色く、太陽みたいに輝く小さな花。

僕は、また今日も水をやりを外に出た……。

黄色い花（後書き）

友達に見せたところ『ヒトリ』シリーズの中で一番良い話だと言ってくれました＞＜。

他は死にネタが多いので仕方ないんですがね^^；
これも見方を変えれば死にネタ（

灰色の空

重く冷たい灰色の空。

今日は雪が降るんだっけ……。

僕はそんなことを思いながら薄暗くなった道を歩く。

ふと頬に冷たいものがあたった。

僕の見上げた空には無数の黒い斑点。

……降ってきた。

白く吐き出された息をぼーっと眺めながら僕は歩く。

どれくらい、歩いただろうか。

僕の肩や頭に積もった無数の冬の花びらがキレイに輝きながら溶けていく。

足下には5cmくらいに積もった結晶達が僕が歩くたびにザッザッと踏みしめられている。

歩いてきた道を振り返ると、そこには当たり前のように残る自分だけの足跡。

一つ一つが今まで自分がしてきた事を現すように、深く、踏みつけた時のまま根強く残っている。

僕は、前を向いた。

もう、振り返らないと決めた、灰色の空の下で…。

灰色の空（後書き）

友達の家からの帰り道、人通りは少ないし、暗いし、寒いし・・・
で、こんなもの書きちゃいました。

赤い夢

目が覚めた。

いつの間にかうたた寝していたのだろう、窓の外を見るともう日が暮れはじめている。

荷物を持ち机から離れると、僕は教室を出た。

コツ、コツ、コツ、コツ、と静かな廊下に自分の足音だけが響く。

なんか・・・気味悪いな。

窓から射す夕日のせいか壁が赤く色づいている。

階段を降りようとしたとき、誰かに押された気がした。

僕は体制を崩し頭から真っ逆さまに落ちる。

もうダメかと思った瞬間。

目が覚めた。

あれ・・・。

今のは・・・夢？

とりあえず、良かった。

外は夕日で赤く染まっている。

僕は夢と同じように教室を出て廊下を歩いた。

コツ、コツ、コツと、誰もいない廊下に僕の足音が響く。

通り過ぎる教室の中も廊下の壁も僕自身も、夕日に染まって真っ赤になっている。

それは夕日の色よりもっと濃い、キレイな赤色。

さっきの夢よりも赤い気もするくらいだ。

角を曲がり階段を降りようとしたとき、笑い声が聞こえた。

驚く間もなく背中を押され、落ちた。

目が、覚めた。

・・・いい加減、おかしい。

僕は教室を飛び出し廊下を走った。

カッカッカッカッ。

コツ、コツ、コツ、コツ。

足音が二重に聞こえる。

廊下や教室の中はすべて赤いナニカで真っ赤に染まり僕の感覚を鈍らせる。

階段に差し掛かった。

角を曲がり降りる前に振り向いた。

そこには、真っ赤な壁が続いているだけで誰もいない。

ホッとして、前を向き階段を降りようとしたとき、後ろから笑い声が聞こえた。

目が、覚めた。

赤い夢（後書き）

無限ループは怖いという話。

青いてるてる坊主

今日の天気予報では、明日は雨らしい。

しかも、雷まで落ちる可能性もあるほどのどしや降りだ。

どうしよう、大事な用があるのに・・・。

今の時代、ちょっと古い手かも知れないが、僕はてるてる坊主を作ることにした。

ああ、あいにく使える紙もティッシュも布もない。

どうしたものか・・・。

ああ・・・そうだ。

僕がてるてる坊主になればいいじゃないか・・・。

次の日、青天の空の下、笑いながら天井からぶら下がる男の姿があった・・・。

青いてるてる坊主（後書き）

これ書いてる時眠くて、しばらく書いてたこと忘れてた
W W W W

赤い海

僕の周りは全部海。

キレイなキレイな、赤い海。

僕はひとりでそこにいた。

ぽつりぽつりと呟きながら

僕は独りでそこにいた。

赤く輝く広い海は

波打つことなく、時間が止まったように音すらしない。

一人。また一人。と呟きながら

僕は赤い海に沈もうとしている。

もうすぐ首まで沈む。

ドロドロした赤い水は

僕にへばりついて離れない。

もう一人。また一人。と僕は呪文のように繰り返す。

僕が呟けば赤い海は増して、増えて、僕を沈める。

一人。また一人。誰かが消えて、海になる。

文字数・・・！！！！

あとがきを書かせていただきます^^;

この話は学校で授業中、メモ帳に書いた話です

授業・・・つまないんだもん・・・。

こんな僕でも高校合格いたしました

今年の受験生！馬鹿でも高校は受かる！！自信をもちんしゃい>▽<
話を戻します。

どうしても文字数が足りませんでした。せめて10話まで載せたかったんですが・・・。

これからあとがきが増える可能性があります

ご了承ください。

赤い海（後書き）

というわけで、後書きのところに後書きを書かない場合があります。

無色の声

誰にも聞こえない。

僕の声は、誰一人にも聞こえない。

何度呼んでも。

何度叫んでも。

誰にも聞こえない。

誰も気付かない。

誰にも聞こえない。

僕の声が聞こえない。

僕自身が聞こえない。

いくら声を出そうとしても。

どれだけ頑張って叫んでみても。

聞こえない。

誰にも聞こえない。

誰も聞こうとしてくれない。

いつも呼んでるのに。

ずっと、泣きながら叫んでいるのに。

誰にも、聞こえない。

文字数合わせあとがきコーナー
これたしか、書いたの寝る時だったかな、部屋から居間まで近いはずなのに何回呼んでも誰も気づいてくれなかったんです。

んで、誰にも聞こえない。で一つ書けるじゃん。とかチカチ書いてみました。

あ、余談ですが。今日携帯買い換えたのですが。やっぱ使いにくいですね

機能は良いんですがボタンの配置が違ったり、、ね。

SDに入れたてた書いてる最中の小説たちがなかなか見つからなくて焦りましたwww

ちゃんと見つかりましたがねwww

では文字数も足りるようなのでこの辺で^^

赤い未来

夢で見た近い未来。

僕は真っ赤に染まっていた。

僕だけじゃない、周りも真っ赤に染まっていた。

夢で見た近い未来。

僕は真っ赤な涙を流していた。

赤く染まりながら、僕は真っ赤な涙を流していた。

夢で見た、近い未来。

『未来』は『今』になって、僕は真っ赤に染まりはじめている。

泣きながら、自分の赤に染まりはじめている・・・。

文字数合わせあとがき
流歌です。

『ヒトリ』シリーズこれにて終わりとします。

10話と、短いものでしたが読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

他の小説たちも面白くないものばかりですが、あり得ないほどヒマな時にでも読んでみてくださいかい^^
では文字数も足りましたのでこのへんで^^

赤い未来（後書き）

またお会いしましょう・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9066j/>

ミニ物語～ヒトリ～

2010年10月15日21時08分発行